

『それでも生きる子供たちへ』

2005年/イタリア、フランス/オムニバス映画

日々の小さな出来事を感じる幸せ

会員 小峯 健介 (57期)



『それでも生きる子供たちへ』
発売中
価格：1,143円(税抜)
発売・販売元：ギャガ
©2005 MK FILM PRODUCTIONS
Srl RAI CINEMA SpA

標題作は7つの短編作品で構成されています。7作品は、監督も舞台となる国（ルワンダ、セルビア・モンテネグロ、アメリカ、ブラジル、イギリス、イタリア、中国）も異なりますが、いずれも子供たちが主役という点で共通しております。各作品には、両親の別離、ストリートチルドレン、HIV胎内感染、少年兵士などの社会問題が描かれております。

作品のパッケージには、「厳しい現実の中、それでも生きる子供たちの輝く生命力」、「何不自由なく過ごし、命の尊ささえ見失っている現代人に、“生きることの素晴らしさ、命の尊さ”を思い起こさせてくれる」と謳われております。

7作品の中でもとりわけ強く印象に残ったのが、ジョン・ウー（中国人）監督作品の『桑桑（ソンソン）と小猫（シャオマオ）』です。感動の押し付けのようになってしまうのは本意ではありませんが、本作は繰り返し見ても感動します。

物語の舞台は中国です。裕福な家庭に生まれながらも、両親の不仲などから必ずしも幸せとはいえない少女（桑桑）と、親に棄てられ貧しい生活環境ながらも、健気に力強く生きている少女（小猫）、対照的な二人の少女が主役の物語です。

映画のストーリーを文章で説明するのはナンセンスな気もしますが、かといって全く紹介しないのも不親切かと思いましたので、簡潔にご紹介いたします。

《ストーリー》

赤子のときに親から路上に棄てられた小猫は、路上のゴミ拾いをして生計を立てている心優しい老翁に拾われ育てられ、貧しいながらも幸せそうに暮らしておりました。ところが、あるとき、老翁は

車に轢かれて死んでしまいます。一人残された小猫は、子供たちに花売りをさせる親方のもとに引き取られ、厳しいノルマのもと、花を買ってもらおうと道行く人々に懸命に声をかけます。そんなあるとき、いつものように路上で声をかけていた小猫は桑桑に遭遇し、売り物の花をプレゼントします。桑桑を乗せて車ごと川に飛び込もうとしていた桑桑の母親は、小猫からプレゼントされた花を見つめて笑顔で鼻歌を歌う桑桑の様子を見て、川に飛び込むことを踏みとどまります。最後は、将来への希望を感じさせる内容で幕を閉じます。

ストーリー自体は至ってシンプルですが、一つ一つの場面がどれも印象的です。とりわけ、二人の少女の対比が実に巧みに描かれており、対照的な二人の少女を見ていると、「本当の幸せとは何か」と考えさせられます。裕福であるからといって幸せであるとは限りませんし、貧しいからといって不幸せであるとも限りません。裕福でなくてもよいので、日々の小さな出来事にも幸せを感じられるように、前向きに生きていきたいと感じさせられます。

本作は、小猫役の少女の演技がとても見事です。貧しさを苦ともせず、一生懸命に生きていこうとする健気な姿は、私の大好きなドラマ「おしん」（少女編）にも通じるものがあります。小猫の一生懸命な姿を見ていると、日々の生活や業務の中で辛く困難な場面に直面しても、自分のことを必要としてくれる人たちのためにも頑張っていこうという、前向きな気持ちが湧いてきます。

将来への希望を感じられ、前向きな気持ちになれる、お薦めの作品です。